

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

5. 身 体 (翻 訳)

その2

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

5. *Bodies*

Part 2

後 藤 廣 文

Hirofumi GOTOH

これまで見てきた例は全て人体に関するものであるが、人体に関するダンの見識をこれだけとするならば不当に低く見積もることになるであろう。あまり動物に関しては書いていないが、書く時には動物に対して驚くべき反応を示す。「蚤」を例に取ってみよう。これはアーサー・クウィラー・クーチ卿が「英語で書かれたものの中でも最もうんざりするようなことしか」⁴⁶⁾ 書いていないと言った詩で、現代の研究者からもめったにかんばしい評価を受けることのない詩である。蚤の詩は事実古くからあるわいせつな戯れの詩である。ヨーロッパ文学の中にはこの種の詩が数十編あり、その原型は間違ってもオビディウス⁴⁷⁾ にされている。一般的な枠組みは蚤が女性の身体の上にいるのに気づいて身体の上を這いまわり、偶然見つけたこまごまとしたものを説明するというものである。もちろん胸や性器について述べるところが一番のしゃれであった。ダンはこの恥ずかしく思いながらもくすくす笑ってしまうような場面を捨て性的結合に関する堅い議論調の独白形式に作り直し、女性の身体についてはまったく省略し、男と女の血を吸い両者の血が混じりあった身体に注意を引き付けるのである。

この蚤は君でありほくだ。だからそれが
ほくの新床であり、また、結婚式の神殿だ。
君の両親や君がいやがろうと、ほくらはもう結ばれ、
この生きた壁、黒玉の神殿におさまった。⁴⁸⁾

最後の行ではこれまでの英詩では描かれたことがなかったほどに細心の注意を払って蚤を描いている。この生きものの黒い堅い皮膚は生きている——「生きた壁」だということをダンが驚きの念をもって我々に知らせる。この句は「十字架」の頭「骸骨」と同じ意識で書かれている。更に、蚤を神殿や修道院に変質させるのを見ると、その規模は顕微鏡的になっているが、人体という丸屋根のある聖堂を登って行くダンの姿を思い出させる。

説教についてはこれまで見てきたことから判断して、こういった詩を書くダンが蚤のような非常に小さい命を宿すものに対してどんな考えを抱いていたか想像もつかないかもしれない。しかし、

想像のつかないこと、全く想像のつかないことではない。「蠅は生命があるが太陽にはないので太陽より身分が高い」とダンと言う。蠅に関するこの見方は聖アウグスチヌスが最初で、ダンが説教で引用する頻度から見て特に彼の見解に強い印象を与えられたようである。⁴⁹⁾ アウグスチヌスの蠅に関する見方はダンの説教よりはトラハーンの詩に近いことはすぐわかる。実際にはダンの釣鐘体形の女性ように『エトルリア遺跡』の中で「残酷な力が多く植物をなぎ倒す。それでも、再び立ち上がる雛菊に比べればピラミッドも一瞬の存在」⁵⁰⁾ と生命を賛美する D.H.ロレンスの方がより近いと思わせられる。ダンも説教の中で一・二度アウグスチヌスのロレンス風パロディを生み出そうとしているようだ。「チリの中に落ちる栄光の与えられていない雨滴」も「チリから生まれ死ぬことのないあの栄光の聖人」⁵¹⁾ と同じように神の子であり我々の同類だと言う。後の説教で栄誉を与えられることのない生きものにすら神の姿を見ることができると説いて、「飛んでいるぶよ一匹一匹が大天使であるとしたらその中には神がいるとしかいいようがない。地面の上を這うどんなつまらない虫もそうである。」⁵²⁾ と書いている。これを読むと必然的にふとぶよには天使のような輝きがあるのだと思う。しかし、ぶよは大天使ではないし、もしそうであったとしても何の役にも立たないと実際にダンが言っているのだという事実は解消されていない。ぶよはぶよ。虫は相変わらずつまらないもの。雨滴も「栄光が与えられない」ままである。詩より暗い目的のためになされる説教ではたくましい蠅や雛菊がうまく利用されてない。詩と説教には想像されていることに対応するところがあるが、説教ではダンが取った宗教的姿勢から、蚤はキリスト教徒としてもっと陽気な性格を示すのは重要だっただろうが、生きた黒玉の壁を持つ蚤についての話を省かざるを得なかったのである。

しかし、詩に戻ると最良の生物学的作品は明らかに『魂の遍歴』であるがこの詩はほぼ一致して評論家の非難を受けている。グリアソンはこの詩は失敗なだけでなく、「全くの忌まわしき」と理由なく「嫌悪感を覚えさせる」ものがあると言いダンの心の最も不快な部分を表していると断言する気にさせられたのである。⁵³⁾ イーヴリン・ハーディーはグリアソンに同意して「風変わりな、嫌悪感を覚えさせる」と言い、R.C.ボールドはダンの全詩の中でも「もっともつまらない詩」と考えている。⁵⁴⁾ イーヴリン・シンプソンは一般的な非難に加えて「ド・クウエンシーしかこの詩を誉めていない」と気難しいことを言う。⁵⁵⁾ が、これらは正しくない。ブラウニングも誉めており「クロイシクの二人の詩人」に3行を引用している。しかし、ブラウニングもド・クウエンシーもその論評の中で詩中に表された非凡なほどの生命に対する正確で鋭い反応に関しては言及していない。ド・クウエンシーはこの詩は「いくつかの大きなダイヤモンドで構成されており」、その思想と叙述は「エゼキエルやアイスキュロスのそれのように燃えるような熱情と暗たんたる思いが入り混じり、高尚である」と言う。ブラウニングは「尊敬すべき威厳のあるダン」の作品であり、「無情の思いにとらわれたダン博士」の「弔鐘を奏でるものである」⁵⁶⁾ とする（あるいは、と詩中の人物に言わせる）。

この詩の序に1601年8月16日という日付があるのでこれを基に想定するとダンがエジャトンの秘書として職に就いている時あるいはその前のいずれかに書かれたものと思われる。尊師ダン博士の作品とは思われないものである。この詩は風刺詩でイブがもいだリングの魂が様々な獣から人間へ

と再生して行く過程をたどって行く。魂がどこで終るかが議論されており、エリザベス女王とカルヴィンがその候補者になっている。ジョンソンはカルヴィン⁵⁷⁾がその最終目的地であろうとウィリアム・ドラモンドに言っているが、ダンはエリザベス女王を暗示している。いずれにしろ、当然のことながら反プロテスタントの詩であったらう。従って、ダンがなかなかカトリックから離れられない更なる証拠と取れることはほぼ間違いない。しかし、問題が解決したわけではない。というのはこの作品を完成させてはいないからである。最初の編第52連で終わり、その時までには魂はマンドレイク、すずめ、数種の魚、鯨、ネズミ、二匹の狼、猿と経て、最後にカインの妹であり妻であるテメクの中に入って行く。猿は彼女の母やアダムの五女ジファテキアに好色な振る舞いをするのである。

生物界の把握という観点から見ればこの詩は確かにダンの傑作である。読者にこれを理解してもらうためには、まず、雀の孵化が述べられているところを引用するのがいいだろう。マンドレイクから逃れるために魂は巧みに入り込む。

小さな青い卵の中に飛び込んだ。哀れな親鳥が
暖めるために羽根を広げじっと座っていたが、
ついに、中の小鳥が殻を蹴破って、自分で穴をあけた。

出てきたのは雀であったが、これをこの魂の動く宿とした。
その生まれたての腕には堅い羽毛が生え始めていたが、
歯茎を押し破って生えてくる乳歯のように痛かった。
身体はまだジェリー状であり、骨は糸のようであった。
身体一面が産毛のマントをまとっていた。
前に住んでいた家でも飲み込めそうな大きな
口を開け、開口一番不満を言った。肉をくれと
大きな声で鳴いたのである。人間にふさわしい肉を盗んで
父親は彼に与えたが、一月もしない内に、
この子は羽根をはばたかせて雌鳥から父親を追い払うのだ。⁵⁸⁾

こういった行のある詩——たとえ他には何もなくとも——が「つまらない」と思う批評家がいるとすれば一般的な秩序のない詩こそがつまらない詩なのだと言いたい。ダンの同時代人で孵化した雛をこれほど感覚的に文章化できる詩人が他にいたであろうか。卵の色、母鳥の暖かさ、雛のあけた大きな口が一つになって、弱々しいがたくましい生命力を持っているという感覚が引き起こされるのである。人間を思わせるような描き方（子宮の中にいるように蹴る「子供」、産毛のマント）をしているが、品行が悪くて、ひどく親不孝な行いをするという点では雀は全くの雀でしかない。半透明のジェリーの中でまだ「糸」の骨は、ガラスに仕掛けられたあの「骨のようなギザギザの」名前のように、頭脳が身体の隅々まで下降させる「神経の糸」のように、今まで見てきたダンに典

型的な書き方だとわかる。ダン独特のあの注意を喚起させるやり方で硬さともろさが混ぜ合わされている。また、「ジェリー」はベッドの中のサマセット伯爵夫人を表す「ジェリー」(‘gellie’)や、精液という「排泄物としてのジェリー」との関連性を示し、「ジェリー状の」死体は溶解するのである。説教の中で小気味よさそうにこれらのことを語るダンの姿は既に見たところである。

雀の皮膚の内側で特に我々の注意を引くのは菌莖を破って生えてくる菌と羽根の生え方との同一性である。身体が全て菌莖のようなもので、腕の肉を破って生えてくるような気にさせられるのである。この考えはプラトンから得たものようである。プラトンは『パイダラス』で羽根を生やす魂についてこう書いている。「さて、この過程では菌が生え始めると魂全体が脈打ち鼓動し、菌莖に焦燥感と不快感があるのと全く同じ様に羽根が生え始めると魂は苦痛を受ける。つまり、羽根が生え始めると魂は発熱しかゆみと不快感を覚える。」⁵⁹⁾ この詩の魂と魂の行為に関する記述は『パイダラス』がその出典であろう。しかし、プラトンにあっては抽象的であったものをダンは具体的に描いている。菌のように皮膚を破って生える羽根はダンの詩では魂ではなく雛鳥の「生の腕」に生え始めるのである。

この豊かで、濃厚で、繊細な詩行の他に（これは偉大な詩なので至るところから引用することができるが、引用すればダンより劣った詩人という評価を得ることになるであろう）人間の胚に関する叙述がある。

アダムとイブが血を混ぜ合わせると、錬金術師たちの
定温の炎のように、穏やかな暖かさの子宮の中で
それは暖められ型造られた。その一部は
海綿のような肝臓になり、高い山の額にある豊かな
水路のように、身体のあらゆる部分に生命を守る水分を
惜しみなく送っているのである。
別の一部は硬くなってもっと強い心臓となった。
忙しく働く炉は生気を発散させていた。

さらに、別の部分は感覚の源泉、すなわち、
柔らかいが、よく武装した、感じる脳となった。
そこから肉体を結ぶ多くの神経の糸が
のびていた……………⁶⁰⁾

組織を極めて注意深く描いているので、糸状で、つぶれやすく、浸透性のある液状の形成途中の胚を実際に我々の手のひらに乗せてくれるのである。その熱、脈動、凝固が直接我々の感覚に働きかける。ダンが言葉を駆使しようとしていることに一番近いと思われる日常の経験としては外科手術を写したフィルムを見て受けるようなあの恐る恐る生身の人間に触れるような感覚である。この経験は平面画像であるが、ダンの言葉は隠喩に満ちあふれている。ぎっしり詰まった意味は複雑で豊

かである。「水路」と「炉」の含意（身体の炉，地下貯蔵庫，食料貯蔵庫は前に見た通りである）によって我々は胚が複雑な構造物であり，その機能の有効性と自立性を確認するのである。「忙しく」はダンにとって常に意味に満ちた語だが，物事を進めるのに生き生きとするという側面と不本意ながらするという側面の両方を意識させる語である。「よく」は冷静さを示唆する語だが「脳」と融合して心の内部には測り知れない深淵があるという感じを与えている。「暖められ」(‘stew’d’)のような慣用的な意味の詰まった語は錬金術的な観点を理解しやすくすると同時にそういった専門的領域を離れておいしそうな匂いのする台所に連れて行ってくれる。「生きた壁」の中の蚤のように「柔らかいが，よく武装した，感じる脳」は柔らかく，強く活動し，「海綿のような」肝臓から心臓に移っていく時には生き生きとした濃度の対比が見出される。液体から大きな血の固まりのようなものへと形あるものになって行くのである。

身体の各部を結びつける組織化された接着力のある堅い「神経の糸」は「埋葬」や「聖遺物」の髪の毛や神経と同質のものであり，これは前に検討したように直ぐにダンらしいものと結びつけられる一節のもう一つの特徴である。しかし，ダンの他にこのようなことを書く詩人がどこにいるのかと尋ねられても見当たらない。英国詩では『魂の遍歴』に匹敵するような詩はヒューズの『からす』までない。ダンのようにヒューズは言葉の肉体化を推し進め，やがて言葉が生肉の固まりのようにページの上に乗る。ヒューズはこう書くのである。

騒がしいそのトンネルを流れる血も黒く
燃える炉に押し込まれた腸も黒く

あるいは

イブの子宮から生まれ出た
彼女の身体の血は—
十字架の上で結ばれた⁶¹⁾

結ぶことや炉，形成中の物を身体の柔らかいところに押し込む傾向は他の誰よりもダンを思い起こさせる。しかし，ダンヒューズのように破壊的な印象を抱かせるような危険を犯すことはない。ダンはどの段階でも繊細な身体器官を慈しんでいる。更に，例えば胚に関する説明のように彼の詩の医学的な解釈は当時の権威ある見解とよく一致している。専門的な情報と感覚的な刺激とを混ぜ合わせて強固なものとしているのである。

この詩では魚のライフ・サイクルを魚の妊娠の瞬間から描いている。水中の場面に注目すべきである。海の中を一群となって動き回る生物の種類やお互いに絶えず殺し合うことに焦点が置かれている。無謀で破壊的な多量の生きものの中にあって一つ一つの小さな生きものは生命を全うするのは難しいということをダンは我々に印象づけるのである。

雌の真砂のような卵子に
 雄のジェリー状の精子が新たにかけられた。
 二匹が行き交う間に触れ合ったのである。
 これら小さな卵の一つがふさわしいと思い
 この魂はそれに形相を与え、魂がふさわしいと思った
 ひれを權にして泳ぐことができたのである。
 うろこはまだ羊皮紙のようで、魚であったかもしれないが、
 魚と呼べるような姿は持っていなかったのである。⁶²⁾

ダンが卵ができて受精する過程に我々が普通実験室の水槽の中で何かが孵化しそれを眺める時の好奇のまなざしを我々に向けさせるのである。しかし、いつものようにダンの関心は、臨床的ではあるが、単なる臨床に終るものではない。喩えを使って小さな生きものの壊れやすさ（「羊皮紙」）と強靱さ（「權」）の二つを詳しく説明している。魚という生きものをただ見ているだけではなく享受しているのである。正確さと奇抜さが重なり合って結実しているのである。一方、「真砂」の卵子と雄の「ジェリー」が触れ合うというのは繰り返し見てきたようにダンの身体に対する見方が集中する傾向にあるさまざまな対照的な構成への継続的な関心と見ることができる。

他方で、規模の大きい鯨では、ここに魂が入っているいろいろな出来事に遭遇するが、集中砲火を浴びせる軍勢と広大な浮かぶホテルとが結び付けられている。

真鍮でできたひれで打つたび毎に
 打たれた海には多くの渦ができたが、その様子は
 大砲が大声を立てて、空気を切り裂くようなもの。
 彼の肋骨は柱のよう。高く丸く盛り上がった彼の皮膚は
 どんな鋼よりも強く、雷に打たれても平気だ。
 飲み込まれたイルカは彼の中でなんの心配もなく泳ぎ、
 近くに陸地を感じることもなかった。彼の巨大な腹は
 まるで陸に囲まれた内海のようにであった。⁶³⁾

鯨の壮大な光景はダン流に金属や建物に変えることやその周辺をしっかりと固めることによって生まれるのである。「打たれた海」（「神経の糸」や「ギザギザの骨ばった名前」のような異質なものを混ぜ合わせても一貫性を失わない句のもう一つの例）は単なる水というよりは堅くて裂けやすいものの中を骨折って進まなければならないという印象を与え、それによって鯨の現実味が増すのである。同時に今までダンの手順を経験してきたことから期待されるように強調されていた鯨の深さと広がり感覚がその傷つきやすさや滲み出る分泌液によって相殺される。「油」が鯨の身体から「滲み出る」という。この動詞には穏やかな漏出という意味がありダンが新しく創り出したものであり、ブラウニングが「ネッド・ブラッツ」で使うまで明らかに二世紀の間使われないままであ

た。また、「からざおのひれを持ったさめ」（オナガザメ）と「鋼の鼻を持った」かじきによって鯨は殺される。

他の有名な詩の魚と較べてみるとダンの詩の魚には非凡なりアリズムがある。ミルトンの「コウマス」の魚は輝くように美しいが、何か別世界のものである。

すべてのひれの群れと共に海とそのざわめきが、
今、モリスダンスのようにゆらめく月光に移動する。⁶⁴⁾

ダンの魚は食べたり食べられたりするのに忙しくモリスダンスをしているひまはない。一方ダンの魚はポープの「ウィンザーの森」⁶⁵⁾の中の魚のようにオーガスタン時代の言葉で塗り重ねられたものに邪魔されることはない。紙のように薄いうろこや真砂のような卵子は当然のことながら詩的であるが、他方着色された金ぴかのポープの魚は家具のように装飾的で、家具が水の中では全く耐えられないのと同じである。

『魂の遍歴』の生きものそのものは現実的なものであるが、その現実性は空想的可能性と伝説的可能性とを実にうまく利用して混ぜ合わせて生まれたものである。こうして生まれた現実性には限界がないということを強調することになる。ダンは身体の中に入り込むということに興味を持っており、納得できる範囲で気に入った一つの動物の伝説は象の鼻の中をよじ登って脳みそをかじって象を殺したと信じられているものである。それを避けるために象は概して寝る前に鼻を結ぶと思われていた。ダンの詩では既に他の処で見えてきたように脳から身体各部に降りている生きた「糸」が目につく。ダンのネズミは象が鼻を結んでいないのを知って鼻の中を真っ直ぐ登って中に入る。

この鼻の中をまるで長い廊下を歩くかのように
ネズミは歩いていた。ネズミはこの巨大な館の部屋を調べていたが、
魂の寝室である脳のところへやって来た。
そこで生命の糸をかみ切った。町全体がねこそぎすっかり
破壊されたかのように、殺された動物は崩れ落ちた。⁶⁶⁾

恋人達の縫い合わされた眼のように恐ろしくも突き通されたものに何か痛みを感じこれによって感覚の鋭さが強められるが、有機物を無機物にする（「金髪の腕輪」「鋼の鼻を持ったかじき」）ダンの手法も存続している。ネズミが象の身体の中に「廊下」「家」「町」を見る。真のダンのやり方では生きものは有機物であるのと同時に建築物である。迷路のような耳の中に入ることに関心を抱くダンの感性も、もっと大きな規模であるが、この詩で効果を現している。同様に象の身体は糸（「生命の糸」）によって結合されているというのはダンの「埋葬」の「神経の糸」のように繊維状の複雑な結合体を示唆する。ダンにとって身体は建物であり網状組織体であり、こういった隠喩が表す対比的な構成に対して我々は対比反応ではなく身体的な反応に賛辞を贈る必要がある。

魚や動物の生命だけではなく植物の生命が『魂の遍歴』では風変わりな方法で呈示されている。

例えば、「ひいらぎの中を流れる粘着性の血」⁶⁷⁾ について書いており、この隠喩によって雀の腕の皮膚を破って生えてくる羽根のように我々自身の身体を用いて自然界を手短に体験することができるのである。エデンの園で蛇がリンゴをもぎ取る場面で植物の生命のイメージが喚起されるのである。蛇が

その極細の葉脈を切断し、この魂が木の根から
生命を吸い上げていた柔らかな水管を
断ち切った。⁶⁸⁾

リンゴの葉脈によって与えられたこの人目を誘う顕微鏡的な過程でダンは「血管」を持つ人体と壊れやすい建造物（「柔らかい水管」）の両方を、これは蚤の生きた壁にも与えられたものだが、植物の世界に押し込むのである。これによって葉脈の持つ堅さと繊細さが同時に現出するのである。

植物の生命の生き生きとした様子が詩や宗教詩や説教に取り入れられているのである。春の愛の目覚めあるいは緑なす季節や枯死する季節、「世界のすべての樹液」の動きや芽や根の中の動きを呼び出して不安と病気による心のおびえを描く。これらのイメージを使ってダン人間が意識しないずっと深い暗い領域と自分とを関連づける。同じように「キリストに捧げる賛歌、作者がドイツに旅をするに際して」の中で人類、皮相的な人類、を超えて自分が木との原始的な交わりの中に入っていくのを感じているのである。

樹液が冬になると根元に落ちて行くように
今や私も私の冬に向かって落ちて行く。
そこであなた以外は、真の愛の永遠の根元と
なるものを知ることはできない。⁶⁹⁾

一、二度既に言及したようにロレンス（例えば『エトルリア遺跡』で「木の根元を駆けあがりその木の巨大な体をその命を創り出すそのすばやい力、人間の足や脚を駆けあがり心臓を創り出すそのすばやい力」と書くロレンス）との類似性はここで非常に明白となる。ダンの詩行を支配する感覚のない原始的なものに対する衝動はダンを知性的な詩人——閃光のような頭の働きの調達人——という見方とは著しい対照をなすが、これがこの見方を一般的なものにしたダンの天賦の才のもう一つの欠くことのできない要素である。「愛の成長」という詩の主たるテーマは人間の愛は人間のものではなく、空気や天候、太陽の「活力」や草の成長と人間とを結びつける生物学的過程によって生まれ支配されているということである。愛は自然の非理性的な規則に関係するのである。ダン愛を枝に咲く花として描く。

つつましい愛の行為が、枝に花が咲くように
目覚めた愛の根元から、今や、芽吹いている。

性行為になぞらえられる花びらの開花のみならず漠然とした男根意識を突起した芽に重ねることによってこの詩行に微妙な意味が生じるのである。自然が目覚めるのである。前述の「キリストに捧げる賛歌」からの引用にある「落ちて行く」という語のように「目覚めた」という語によって樹液が根元に送られ、残存していた感覚が枝の隅々に送られることがわかる。説教で「太陽が沈む時の花のようにしほみ、縮み、あたかも強風を受けたかのように自ら閉じる」⁷⁰⁾ 傷ついた魂について語る時も同じである。ダンは花がどんな風に見えるのか（「視覚美」）も花がどんな風に感じているのかも語らない。人間の背後に自然界を溶け込ませたり自然界を心の光としてかかけたりすることによって人間と自然界の融合を成しとげるのである。

この融合は、既に見たように、『魂の遍歴』の中で最も広く最もうまく成しとげられている。この詩は敏感に反応する動物や植物の集成、つまり動物園、水族館、産科病棟が一つにされているのである。その中で人間のような植物が最終的にマンドレイクとして表される。地面から引き抜かれる時に人間のように叫び声をあげるといふ伝説のある根を持つ植物で、ダンの描くマンドレイクの中でもこの詩のマンドレイクが最も優れている。魂は「暗い湿地」を見つけ大地の「穴」を通して植物に侵入すると詩は語る。

このように力を得たこの植物は本来ないところに無理矢理
自分の場所を得たのである。自然の成り行きでは
空気は水に、水はもっと重いものに押し出されるのだが、
この植物の根が押しかけてきたので
海綿のような湿地は場所を明渡した。
我が国の街路でも王を一目見ようと多くの人が
群がり立ち止まってイタチですら通れないほどであった。
女王が近づくと人々は押し合いながらも道をあける。
まるでその時だけ人々の太った身体が平らになるようだ。

この植物はその右手を東の方に突き出し
左手を西の方に突き出した。その両手の先端は
十本の細い糸のように分かれていたが、それらは指であった。
その様子はぐっすり眠っている者が寝ているベッドの上で
一方の脚をこちら側に、もう一方の脚をあちら側に
投げ出して、足の指でその脚を支えているようなものだ。
彼の身体の真中に、最初の日、毛が生えてきたが、
それは恋の商売では彼はばりばりのやり手で
良くも悪くも習慣となっていることを示すためであった。

この植物の実には妊娠をあおり、葉はそれを阻止したのである。

しゃべれない口を持ち、目は見えず、耳は聞こえず、
 不思議な髪が肩のところまで垂れ下がっていた。
 若きアポロの巨像のように、彼はまっすぐに立ち
 あたかも大地を征服したかのように、その頭の上には
 草におおわれた冠をのせていたが、それには
 小さな実がちりばめられていた。その実はまばゆいばかりの
 赤であったので恋人の赤い唇も白いと言ってしまうほどだった。
 かくして人の気配すらない寂しい場所を占拠したこの魂の
 第二の宿はその客によって建てられたのである。

これが生きながらに葬られた男のようなマンドレイクであった。⁷¹⁾

これまで触れてこなかったダンの想像力のいくつかの特徴がこれらの驚くべき連で結びつけられている。巨大さ、圧迫感、密集度がぼんやりと大きく表されている。締められたバネのような行が解かれていくにつれて読者は筋肉が震えるのを覚えるのである。マンドレイクが我々の身体を押し動かすのである。根に押しつぶされる大地を押しつぶされそうな人々に喩えることによってこの効果が生み出されているのである。エリザベス女王の私的なお出ましで完結する入念な群集に関する明喩のすべても根の回りの土がどんな様子になるかを告げるためにだけに導入されているのである。

第二連でも我々の身体を詩中の描写に取り入れようとするダンの企てが支配的である。細い糸のような指や上を向いた足の指先で手探りをするマンドレイクの姿は思想と感情の混じった思考方法の一つの表れである。マンドレイクのみだらなほどの毛深さは一層感覚的に突出している。その詩行は交互に込み合ってきてしる。例えば第2連5行目のゆがんだ始まり（「一方の脚をこちら側に」）は動物ののだらしなく伸ばした脚のようにこの行が斜めに引きずられていくように感じさせる。更に、マンドレイクから伸びる糸ないしは細い糸——陰毛、肩に垂れ下がる「不思議な髪」、腕の先の「糸」——は既に見たようにダンがいつも我々に注意を喚起させるあの有機体の結合力とその精密さを用いて複雑な生きているものの網目状の組織とマンドレイクを結びつけるのである。窓ガラスに引っかいて書いた骸骨のようにマンドレイクは糸でくっついているのである。

更にその上にマンドレイクはそれ自体の中にダンの作品の中で身体にうまく実体存在を与えている相反する性質のもの——鈍くすばやい、麻痺と活気——がぎっしり詰められている。マンドレイクは「生きながらに」「葬られた」のである。口、眼、耳がありながら話せない、見えない、聞こえない。目立った物体なのに「静か」である。男であると同時に植物であるマンドレイクは一風変わった劇的な方法でこれら対照的な性質と結合されているが、これはダンがこういったことに魅力を感じている理由の説明にもなっている。この点でマンドレイクと競うことのできるほとんど唯一のものは両下肢麻痺患者であり、少し後の説教で麻痺の男に好奇心をそそられただちに彼の描くマンドレイクを思わせる言葉を使っている。「この生きながらに死んだ男、この生きながらに埋められた男」（『魂の遍歴』の「この生きながらに埋められた男」と比べてみるとよい）には「魂はあるが袋の中の魂である」⁷²⁾と説教で言う。後者の句にはダンにとって非常に魅力的な感覚と無感覚の結合

が秘められている。この説教を書くに際しては当然のことながらこの句が20年近く心の中にあったことになる。エレジー「秋のような顔」には既に年齢によって能力を奪われた身体を「魂を入れる袋」⁷³⁾としてその特性を表している。

とはいえ『魂の遍歴』が受けてきた研究者達の鈍い反応を我々はどうすべきだろうか。グリアソンや他の研究者達はこの詩をみだらだ解釈してただまごついているだけのようだ。狼と犬の交尾(41~44連)、「ふざけ猿と乙女の性交」(46~49連)の描写はおすまし屋を怒らせるかもしれないことはわかるが、とにかく後者の連はダンの詩中最も繊細で優しさの表れたところである。このことについては別の章で触れる。この詩の悪評の理由がどうであれ初期のダンの詩の傑作として認められ復帰させてもよい頃だ。もしダンがこの詩を完成させ、スペンサーの『妖精の女王』よりはむしろこの詩がエリザベス朝の偉大な叙事詩として認められるようになっていたら英文学はどうなっていたのだろうかと考えてみたくなる。もしそうになっていたとしたら空想的で保守的なスペンサーの代わりに(新しい17世紀詩を始め次にくる詩人の模範とするために)知的特長を備えた進歩的で議論を呼びそうな作品を持つことになったであろう。

胚や有機体を持った作品が我々に開放してくれる経験の領域は詩というよりは通常科学の分野であるがダンを決してそれを科学的事実という単色のものには後退させない。彼は感覚の中にひたるのである。既に見たようにそのために常に自然と肉体感覚とを関連づけ、それによって世界を感じると共に自分自身の肉体を感じるようになるのである。更に他の詩でも見られるように感じると共に感じられる身体能力を強調する状況になると特有の鋭さで反応するのである。歯茎を破って生えてくる歯、血のねばり、海綿のような肝臓、心臓の「忙しく働く炉」、こういったものや未完の叙事詩に見られる同じような集中力が我々を感動させる。詩や説教の中で髪や骨に心を引き寄せられる生き生きとした感覚を持った身体に宿る不活発なその構成物質を想像して楽しむダンの性向の練習の場が『魂の遍歴』であったのだ。

ダンの身体器官に関わる客観的な見方は医学教育、特に解剖学の発展に対する興味が刺激になっていることは明らかである。解剖学は主としてヴェサリウスの実験によってダンが生まれる半世紀以上前に目覚ましい進歩を遂げており、ヴェサリウスがこの実験をまとめて1543年に『人体組織について』として出版した。ダンがこの問題に関して想像力を高めたことは明白である。「拷問にかけられた死体」は「解剖に使えない」⁷⁴⁾と恋愛詩で鋭い見解を述べている。ダンは身体を慎重に扱う敏感な包皮としてだけではなく解剖標本とみなすように訓練されていた。彼の作品で特徴的なのは二面性を融合することである。例えば「比喩」での外科医が女性の傷に探り針を入れるようなイメージは技術的なことと優しさを結び付けている。また、骨に巻きついた金髪の腕輪や窓ガラスに刻んだ振るえる骸骨と書く時身体の生命のない構造物と生き生きと持続する生命体とを混ぜ合わせるのである。身体または身体の一部が詩に表れるとほぼ一定してこの二重性を跡付けることができる。他の例として「聖列加入」で想定された崇拜者達の恋人二人に対する祈りの中の二人の眼の語り方を考えてみるとよい。

今では狂乱となった愛を平和とされた方々よ、
 全世界の魂を抽出し、お互いの眼の中に
 凝縮することにより、
 鏡となったり、望遠鏡となって、
 眼が全てのものの縮図を見せたから
 田舎も都会も宮廷も持った方々よ、
 天から愛の手本をお示してください。⁷⁵⁾

崇拜者達が選んだこの隠喩は恋人達の眼を錬金術師の実験室の複雑な器具——錬金術師が「魂」ないし金や銀のような成分のエキスを蒸留しようとする様々な管や蒸留器——に変えるのである。しかし、この手の込んだ専門的な隠喩も同時にお互いに見つめ合う恋人達やその眼に縮小された全世界を見るという素朴で敬虔なイメージと結びついているのだ。読者は科学的のみならず情緒的にも反応を示すのである。もちろんこの眼に対する調和の取れた反応はエリオットの言う知と情の、特にダンの、混合に関係するのだが、これ以上に特徴的なのはその反応が『魂の遍歴』に満ちる敏感な生理機能に関係していることである。眼はガラスであるのと同時に生きたものである。

生きた錬金術師の器具の他の例として子宮とその暖かさに注意を向ける「比喩」がある。

……………錬金術師の用いる男性らしい安定した炎
 その熱が、暖められたランビキの腹の中の
 価値のない土くれに、金の魂を吹き込む。
 このような大切な炎が恋人の最も愛すべきところに燃えている。⁷⁶⁾

この一節はイヴの子宮の中の胚を育てた「錬金術師達の定温の炎」を思い出させるが、事実ダンが錬金術に惹かれた理由の一つは出産や誕生のような人間的行為と錬金術上の過程を絶えず一致させることにあった。偉大な16世紀の偽医者、魔術師、錬金術師のパラセルサスは、ダンは彼の著作を熟知していたが、いつも金属について子宮、精液、妊娠という言葉で話す。パラセルサスの宇宙では化学反応の全ての成分は生きものである。「金属は直ぐに水銀に変えることができるし、水銀になることができるし、母親の子宮の中の胎児のように40週ずっと熱し続ければ火によって生まれ変わり、不純物が取り除かれる」⁷⁷⁾と書いている。こういった言葉から当然のことながら人体を科学的な器具であると同時に有機体として見たいくなるのである。ダンは子宮を製造された一連の器具として見ると共に大切な生きたものとしても見るのである。愛の巣と実験室が溶解して一つとなるのである。

子宮と蒸留器の融合のように性には火の性質があるとするダンの考え方はパラセルサス的である。パラセルサスは「自然の火は男性的な火あるいは第一作用」⁷⁸⁾と書く。機能的で隅々まで満ちる身体の熱はダンの錬金術的想像力を刺激する。「恍惚」の始めの汗で「しっかりとくっついた」恋人達の手は、例えば化学反応に関係している。パラセルサスは論文『金属と結合に関する変成につい

て』⁷⁹⁾の中で「結合」は錬金術上の一過程であると説明しており、この過程で高温に熱せられた固形物質は他のものの中に入り込むのである。身体からの排泄物に対するダンの関心を見ると彼の関心が実験のために熱を提供する錬金術師の言う糞にあることも理解できる。パラセルサスは金は埋めてその上に「新鮮な人間の尿や鳩の糞の肥料を施せ」ば重くなると信じていたし、抽出、分離、注入の過程に必用な一定の温度を与えるためには試薬の入った容器を「一ヶ月間馬の糞の中に入れておくこと」⁸⁰⁾を推奨している。ダンは書簡詩でこの方法を是認している。

薬草から蒸留によって不純物を取り除き
純粋な葉を抽出する時には火や太陽よりは
ずっと嫌われている糞の熱の方が効果的です。⁸¹⁾

これがダンにとって魅力的なのは解剖用階段教室と同じように有機物質——ふんや肉——が科学用具の一つに変わる現場を見せるからである。

こういった想像方法に対する好みを最も明確に表す現代作家はオルダス・ハックスリーである。彼は楽しみながら我々に身体を違った角度から見ることを気づかせようとし、『下らぬ本』では典型的なハックスリー流の博識者キャラミーが話題になっていることについて自分の手を見本にして理解の早い女性に講義をする。光学の話をしながらからミーは手は光をさえぎるものでしかないと述べる。が、

…………それは同時に十二の並列する世界に存在する。電荷として、分子として、生きた脳細胞として、道徳的存在の一部善悪の手段として存在し、物質界と精神界の中に存在する。このことから必然的に人はこれら違った存在の間にどんな関係があるのかと更に尋ねる。生命と化学、善・悪と電荷、細胞の集まったものと慈愛の情に共通するものは何かと尋ねる。ここに深淵が生まれる。というのは少なくとも何の関係もないと見えるからだ。宇宙は性質の異なった別個の宇宙の上に何層にも重なり合っているのだ。⁸²⁾

1925年に出版されたこの本はダンの詩に魅せられた世代の人々を興奮させた。両者の類似性は明らかだが、同時に違いもある。ハックスリーが科学的存在としての身体について言う時はたいてい絶望的な笑いを浮かべるのである。同小説の前の方で快活な8才のアイリーンが寒い夜戸外に出る場面がある。

アイリーンは胸の前で腕を組み体を温めようとした。が、残念ながら血と肉からなるこの腕のいわばえり巻は寒さには敏感であった。半袖のドレスだったので吹いて来る風に腕から体温を奪われ、周りの空気の温度は百兆分の一度高められた。⁸³⁾

アイリーンは美しい少女だという見方ができるが、別の同様に妥当な見方をすると非効率的な発電

機である。ハックスリーが読者の注意を温度に向けさせるのはその目的を果たすためではない。その点ではダンと対照的である。子宮から発するダンの女性の「慈しみの愛」は科学的実験に必用な温度と結びついて下げられるのではなく上げられるのである。ダンの想像力には結合性があるが、ハックスリーは断片的である。ハックスリーにとって分断されそれぞれ無関係な層となってしまう宇宙はパラセルサスはともかくダンにとって多様ではあるが統一された組織体で、生き生きとした対応と関連に満ち神の眼に照らされているのである。

この章全体で例証したダンの身体に対する深い共鳴に対して更なる疑問が一つ湧く。この疑問にはハックスリーも思考を巡らせた。精神と魂は単なる身体のさまざまな機能の一つでしかないのかそれとも身体の機能の及ばないものなのか？ハックスリーの『多くの夏を経て』の中でドクター・オビスポーはシェリーの『厭世観』は長期にわたる結核性の肋膜炎の結果生まれたものでもっとよい治療を受けていればロマン派詩人達は全てあのような作品を書かなくてもよかつただろうと言う。⁸⁴⁾ オビスポーの皮肉のねらいは楽しそうな抗議の叫び声を引き出すことでしかなかった。しかし、ルネッサンスの他の思想家はともかくダンにとってはこれは現実の重大な問題であった。もし魂が身体に依存しているとすれば魂は不死のものではなく、身体の死と共に死ぬことになるという結論は合理的のように思われた。これは16世紀では無神論的な考えを持つ人の主たる信条の一つであった。例えば1525年に死ぬまでパドヴァの前衛学派の主要人物の一人であったピエトロ・ポンポナーツィ⁸⁵⁾ が採用した見解である。1516年の『靈魂不滅論』の中で彼は魂の不死を支配者が魂の問題を教えやすくするために奨励した迷信だとした。こういったパドヴァ派の考えが一部ジャン・フェルネルのようなフランスの無神論者を通して英国に入り英国人の間にイタリアが無神論者を生んだ国というイメージを作り出した主な原因であった。

ダンが初めて魂が身体に依存するという理論をはっきり述べるにあたって半ば冗談めかして言うのは危険だということは充分認識していた。11番目の「パラドックス」で「身体という贈り物は精神のそれよりよきものである」と言い身体が卓越していることを主張する。

再び言うが身体が精神を作り…………この精神は理性ないしは哲学に暴力をふるったり不正なことをしないで魂と同一視することができる。従って、魂は身体によってその力が与えられるのであり、魂によって身体にその力が与えられるのではないようだ…………。貞操、節制、勇気は精神の贈り物なのか？こういったものの生まれる原因は身体にあるのではないのかと医者に訴えたい。⁸⁶⁾

医学的証拠に訴えるのは重要なことである。パドヴァは医学の中心で偉大なアラビアの医師で魂の不死を否定したアヴェロイーズの思想の大きな影響を受けていた。この問題に対するダンの関心は彼の医学知識と深く関係している。もちろんダンの時代の伝統的なガレノスの医学説はそれぞれの人間の気質を身体の中の血液、胆汁、黒胆汁、粘液の様々な混合に帰している。これによって単な

る身体的症状に精気の機能が関わるという説明に道を開いたのである。再度ダンは8番目の「パラドックス」で物質主義者の傾向を取り「我々の性向や精神、魂は」顔色や身体そのものに「存在原因がある」⁸⁷⁾と言う。

ダンは『パラドックス』ではふざける振りをしてこの問題を扱う不安を抑えていた。が、実際はふざけてはいなかった。身体の卓越性に関する疑問はずっとダンを悩ませ結局は受け入れることができたキリスト教教義の解釈に強く影響を与えた。もう一人のルネッサンス無神論者のそもそもの原因となった異教徒詩人ルクレティウスのように魂は単に身体に依存するばかりではなくそれ自体が有形の物質からなるとまで主張した教父の一人テルトゥリアヌスの著書にダンは身体性の強調に関する心の支えを得たのである。テルトゥリアヌスは実際に魂を見たことがあるという信仰心の篤い婦人を知っており、子宮に宿った最初の段階から魂も生みはらんだ肉体はその全ての働きにおいて魂に関与すると教えた。従って、感覚と知性が別々に働くと思うのは間違いなのである。感覚を働かせるということは知性を使うことであり、逆もまた同じである。思想を感覚的に理解することはエリオットその他の人達がダンの詩の中に発見したもののだが、テルトゥリアヌスにとって必然的なことであった。⁸⁸⁾

信仰を深めて行くある段階でダンは確かに魂は身体と共に死ぬ、あるいは眠り、最後の審判の時まで墓の中にいると信じていた。⁸⁹⁾ 聖職に就く前に正統的信仰に関心を持っていたのでたとえこの考え方を捨てたように見えてとしても、説教では『パラドックス』同様魂は身体に依存し身体なしにはまったく存在できないと言い続けた。ダンはこの点を理解させるためにテルトゥリアヌスを引用する。「テルトゥリアヌスは言う。心の考えたことを共同体としての身体や身体と共にすることとを分けようとするな……魂が身体の中にあって身体と共にすることと身体によってなされることすべてとを。」⁹⁰⁾ これを本気で言っているとはいえない。というかダンの言うこの極端な姿勢は強制的に受け容れさせられたより正統的見解のいくつかに満足できないことが原因である。というのはもし魂が身体の中にあってし、身体と共にし、身体の力でするのでなければ何もしないとするのであれば、魂は身体の死に際して身体なしに生き残ることはできないし、復活に際して身体と再結合はできない。が、ダンはいずれもできるとははっきり言う。とはいえ、彼の死生観については後に検討することになるが、悩んだ末の限定的な言い方である。同様に詩や宗教的著作にはっきりと見られる物質的存在としての身体に対する極度の反応はこの問題に関する彼のキリスト教信条とは相容れないものであるので、個別的で逸脱した傾向を示しているのである。

しかし、この問題に関するダンの苦戦の結果生まれたこの豊かな果実は複雑ではあるが情熱のこもったキリスト教徒としての瞑想の中ではなく、若きエリザベス・ドルアリーの身体に関する「第二周年記念の歌」の有名な行の中に見られる。

一目見れば

彼女だと解った。純粹で雄弁な血が
両ほほで語り、その声ははっきりしていたので
肉体がものを考えると言えるほどである。⁹¹⁾

エリザベスの考える身体は「再び言う、身体が精神を造る。」と書いたダンの明らかに創作である。医学的・神学的問題を越えてしまっているがこれらの行から少女の瞬間的に紅潮する鋭敏な顔が想像される。このように生き生きとしたイメージと生きてはいないイメージとを結びつけるのはダンに典型的なことである。これらの行の直ぐ前でエリザベスの雄弁な身体が金属に変えられている。

もし彼女の魂が金であったということができれば、
彼女の身体は金と銀の合成の琥珀金であり、
その純度は高い……………

琥珀金は金4に対して銀1の合成で銀よりもよく輝く。孤高のエリザベスはこのイメージで捉えられている。この隠喩は「プロブレムⅦ」の釣鐘体形の女性のようにエリザベスを洗練させ、遠い存在とさせるのである。「雄弁な血」を金属に注入することによって金属はその純粋さを失うことなく活発になるのである。この金属が肉体に変わり、その中で血がものを考えるのと同じように微妙にうごくのである。

このようにしてダンは身体と精神を統合させるのである。エリザベスの身体を知的存在として考えたのである。深く根付いた様々な伝統が持つ強制力の中にあってもそうしたのである。何世紀もの間西洋のキリスト教は魂を身体の囚人——籠の鳥、掃き溜めに囚われた天使——と見てきたのである。ダンは一瞬にしてこの古い二元論を壊す。これは『周年記念の歌』のその他のところで伝統的に魂と身体が対立していることを盛んに立証しているのでより一層目立つのである。ダンに関しては首尾一貫していなかったもので、ある考えを後にも先にもこれほど考えたことはないと思えるほど考えたのである。しかし、エリザベスのものを考える肉体が詩中の他の部分と矛盾しなければ、既に見たように、蚤の黒玉の生きた壁や恍惚状態の恋人達のしっかりとくっついた手と一致するものである。

これについてはベッドフォード伯爵夫人に宛てた書簡詩の彼女の身体に関するダンの想像方法に実際非常によく似ている。彼女は肉体で構成されているのではないと言う。そうでなくて「柔らかな水晶の壁が彼女をおおっている」⁹²⁾のである。彼女は古代の不思議について書いた人によるとローマ人が建てた神殿の石の類の透明な石細工（‘specular stone’）から成っているのである。こういった想像はエリザベスの身体に関する説明の初期の別形であり、同じように堅い鉍石の輝きと身体の柔らかさを結びつけたものであり、同様に透明で彼女の想いが見られることになるのである。しかし、それで簡単に伯爵夫人とエリザベス・ドルアリーが似ていると結論づけるのは素直すぎるであろう。ダンには実際に二人の女性に関心があったわけではない。賞賛の詩を作ることを余儀なくされ、想像力を刺激されるままに透明な女性について書くことになったのだ。ミシリア・ブルストレッドの挽歌も同じで、彼女を一種のガラス製の大型（「ガラスの装置」）——生き抜くには「澄み」過ぎ、「透明」過ぎる——と想像したのである。⁹³⁾ 澄んだガラスに対する好みから「聖列加入」の錬金術師的・眼のような眼を書くことになったのである。しかし、エリザベスの身体はベッドフォード夫人やブルストレッド嬢のそれより進歩している。二人の身体は共に透明で生気にあふれているが究極

的には正に魂の存在であるという点で古いキリスト教の規範に基づいて考案されている。エリザベスの身体は違う。彼女は身体を用いて考える。彼女の身体は金属でありながら考えるのである。従って、彼女の清らかで雄弁な血は知識人としての思いというより生命体としての思いを生き生きと述べる。ここで再びロレンスを思い出す。ダンは3世紀前のロレンスである。というのはロレンスにとって主たる目的は冷たく抽象的な知的生活を除外して思想を身体に沈下させることだからである。他の多くの小説のように『馬に乗って去った女』は行動する思考を呈示しているのである。捕らえたインディアンに服を脱がせてもらい、油を塗ってもらい、マッサージされている間にその女性はヨーロッパ化した知性が彼女の中からすべり落ちて行く。

その小麦色の手は信じられないほど力強かった……手足が身体が骨までもが最後にはばら色のもやの中に拡散していくように思えた。その中で彼女の意識は赤く染まった雲の中の何か太陽のきらめきのようなもののように浮かんでいた。⁹⁴⁾

エリザベスのようにロレンスの女性は身体を浄化し、意識する身体を獲得しているのである。

*

この章ではダンの考えを述べる身体について見てきたが、それをダンは二つの相反する方法で行っているということにも注目してきた。一方では身体の物質的独立性を心に浮かべて訓練を受けた解剖学者の公正な眼で身体を見ている。もう一方で生物的感觉に心引かれるものを感じている。身体を単なる骨組みにしてしまう一方で身体をあらゆる意識を持った生きた存在として意識する。繰り返す、しかも巧妙にこれら相反する見方を結合させており、これがダンは思想と感情を結合させると言わしめる一つの理由である。つまり、思想は身体は死んだ付属物と考えるが、感情はそうではないことを知っているからである。恋愛詩に自我意識の強い様子が見られる要因の一つに愛を解剖学の標本に変換することをあげることができる。また、あたかも遠くから眺めるかのように自分の一部を見る。「さあ、ぼくの心を連れて行ってくれ」「迷子になったぼくの眼を返して下さい」「眼をアルプスに……舌を名声に」。⁹⁵⁾ このような明確な表現によって身体をあたかも郵便配達できるかのように扱い身体の一部に感情を重ねて解剖学者の使う言葉を最も複雑な人間関係の中に持ち込もうとしているのである。

他の詩で自分の心や女性の心が黒玉より黒くもろいと言う時、あるいは胸を裂き「色」があり「角」のある「心らしきもの」を見つけたと言う時、あるいはまた心が鏡のように砕かれて粉々になっていると言う時再び詩人が自らの経験を衝動的に客観化しようとしていることに気づく。⁹⁶⁾ 事実彼の存在やその愛を構成するのに絶対に必用なものが硬化した解剖体のギザギザになった断片となるが、その目的は激しさである。自己の内面を硬く砕けるものとして語ることによってのみそれを凝縮した激しいものと思わせることができるのである。同じ理由で宗教詩では自らを金属的なものに変えるのである。神に「錆び」を神の火で清め磁石のように「鉄の心」を引き寄せてくださいと懇願する。⁹⁷⁾ 金属的なもの以外ではどんなものでも彼が渴望する激しさに耐えられなかったからである。これらの例では女性の身体をガラスや金属に変えたり蚤の黒い壁と言ったりする時とは違

う効果をもくろんでいるのであるがこの転換が想像力によって生み出されている点は同じである。生物界と硬く光る物質界との間で同じような交換が行われているのである。

この章を終えるに当たってルーパト・ブルックとクロフツ教授がダンにとって視覚界の美は何の意味もないと言うのはいろいろな意味を含めて不十分だと言おう。単純な意味での視覚が浅く見えるのはダンの詩中での悪戦苦闘の結果として起こったことである。ダンは人体、動物、植物、無生物について書く書かないとに関わらず彼がしようとしていることは視覚とは違う他のもっと深いレベルに、眼を楽しませるといふより我々を敏感にし有機的生命体と堅い本来備わっている妥協することのない物質の両方に関する我々の意識を鋭くさせるように我々を誘い込もうとしているのである。

5. 身 体

- 46) A・クウィラー-クーチ著 『文学研究』 ケンブリッジ 1918年 131ページ
- 47) M.フランソン著 『15世紀恋愛詩のテーマ』 *PMLA* 1941年 307~336ページ
- 48) 『エレジー』 53ページ
- 49) 『説教集』 第2巻 341ページ, 第3巻 329ページ, 第9巻 147ページ
- 50) D.H.ロレンス著 『メキシコの朝とエルトリア遺跡』 ベンギン版 1971年 126ページ
- 51) 『説教集』 第7巻 417ページ
- 52) 『説教集』 第8巻 224ページ
- 53) グリアソン 第2巻 序 22ページ
- 54) イーヴリン・ハーディ 『ダン：対立する精神』 1942年 85ページ, ボールド 123ページ
- 55) シンプソン 19ページ
- 56) ブラウニングとド・クウィシイの意見については『ジョン・ダン, 記念論文集』 中のA.J.スミス著 『ダンの評価に関する論文』 1972年 1~27ページを見よ
- 57) ジョンソン 第1巻 136ページ
- 58) 『風刺詩』 33~34ページ
- 59) プラトン著 『パイドラス』 251C (ラープ版のH.N.ファウラーの翻訳から)
- 60) 『風刺詩』 45~46ページ
- 61) テッド・ヒューズ著 『からす』 1970年 13, 87ページ
- 62) 『風刺詩』 35ページ
- 63) 『風刺詩』 38~39ページ
- 64) ミルトン著 『コウマス』 115~116行
- 65) ポープ著 『ウィンザーの森』 141~146行
- 66) 『風刺詩』 41ページ
- 67) 『風刺詩』 35ページ
- 68) 『風刺詩』 31ページ
- 69) 『聖なる詩』 49ページ
- 70) 『エレジー』 77ページ, 『説教集』 第4巻 310ページ
- 71) 『風刺詩』 32~33ページ
- 72) 『説教集』 第10巻 69ページ
- 73) 『エレジー』 28ページ
- 74) 『エレジー』 47ページ
- 75) 『エレジー』 74~75ページ
- 76) 『エレジー』 6ページ
- 77) パラセルサス著 『神秘学及び錬金術的著作』 A.E.ウエイト訳 1894年 第1巻 126ページ

- 78) 同上 第1巻 304ページ
- 79) 同上 第1巻 41ページ
- 80) 同上 第1巻 129ページ, 第2巻 15ページ
- 81) 『風刺詩』 101ページ
- 82) オルダス・ハックスリー著 『くだらぬ本』 1925年 第5部 第1章
- 83) 同上 第1部 第6章
- 84) オルダス・ハックスリー著 『多くの夏を経て』 1939年 第2部 第6章
- 85) ポンポナーツィに関してはジョージ・T.バックリー著 『英国ルネッサンスの無神論』 シカゴ 1932年を参照
- 86) 『パラドックス』 33ページ
- 87) 『パラドックス』 23ページ
- 88) テルトウリアヌスはA.ロバーツ, J.ドナルドソン共編 『アーンテ・ナイシオン クリスチャン ライブラリー』 第15巻「魂論」の第7章及び第18章, 「復活論」の第16章 エディンバラ 1870年
- 89) 『聖なる詩』 序 43~47ページ
- 90) 『説教集』 第4巻 358ページ
- 91) 『祝婚歌』 48ページ
- 92) 『風刺詩』 63, 101~112ページ
- 93) 『祝婚歌』 62ページ
- 94) D.H.ロレンス著 『馬に乗って去った女』 ペンギン版 1968年 76~77ページ
- 95) 『エレジー』 58, 30, 54ページ
- 96) 『エレジー』 38, 50, 51ページ
- 97) 『聖なる詩』 13, 31ページ

(2005年12月1日 受理)